

■ 開会あいさつ

カネトをうたう合唱団 清水良文氏

今回のテーマは、「三遠南信地域おこし協力隊 0B・0G フォーラムー地域おこし協力隊のその後から学ぶー」とうことで、三遠南信地域の3圏域からそれぞれ1名ずつ、計3名の地域おこし協力隊の0B・0Gと現役隊員をお招きした。



住民セッションという場を設け、長らくこの集まりを続けてきた。こういう場が住民の交流の場となっており、この住民セッションは住民団体が中心となって企画を練り、またざっくばらんに話ができる集まりでもある。本日は、趣旨と地域おこし協力隊制度説明後、3名に発表していただく。その後、質疑応答で活発に意見を述べていただければと思う。

■ 開催および地域おこし協力隊制度について

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一氏

(1) 開催趣旨

地域おこし協力隊は、2009年度から総務省が始めた制度で、2018年度でちょうど10年目を迎えた。これまでに三遠南信地域の各市町村でも地域おこし協力隊制度が導入され、一定の成果と実績が残されてきた。同時にまた、様々な課題も出てきており、同制度の実態や任期を終えた元隊員たちの動向は広く知られているわけではない。そこで今回の住民セッションでは、本テーマを取り上げ、現場で活躍している現役隊員や採用された地域で起業や就農などをして定住している元隊員の3名に、協力隊活動で得た経験や体験などの報告をお願いした。地域おこし協力隊の制度というものは一体どういうものなのか、それから



協力隊退任後についても語っていただき、その実態を参加されたみなさんに知っていただくのが狙いである。

(2) 地域おこし協力隊制度と

三遠南信地域おこし協力隊について

1) 地域おこし協力隊制度

地域おこし協力隊制度は、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱される。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などを行うことになるが、これを「地域協力活動」と定義し、この地域協力活動を行いながらその地域への定住・定着を図る取組である。2017年度時点で隊員数は4,830人（特別交付税ベース）が活動している。

2) 三遠南信地域おこし協力隊の動向

本年度10月1日時点で、東三河地域は12名、遠州地域は10名、南信州地域は105名で合計127名となっている。歴代採用者を調べると性別は男性が58%、女性が42%、年齢は、20~40代が中心だが、50~60代の方もみられる。出身地や前住地は、首都圏からの移住者が多い。Uターン者もみられる。隊員着任前の職業は、多くの方が会社員で、IT関係、教育関係、個人事業主、行政職員もいた。任期は平均すると2~2年半程度となっている。業務内容は、市町村によって様々で、農林業、特産品開発・PR、6次産業化、観光振興、移住定住支援、スポーツ系、アウトドア、教育、婚活支援などである。協力隊退任後の定住者は農林業へ就農、カフェやシェアハウスを営むために起業などしている。

■ 地域おこし協力隊事例報告

自身の経験と「茶種子」を活かした事業化 元設楽町地域おこし協力隊 杉浦 篤 氏

はじめに

私は愛知県知多市の出身で、県外の大学を出て、大学院等で県内に戻ってきた。愛知県の岡崎市にあります基礎生物学研究所というところで植物の基礎研究を行っていた。



6年前に化学物質過敏症という病気を急に発症してしまった。この化学物質過敏症は、個人差はかなり大きく、まだまだ医学的にも未解明な部分が多い病気である。町の中にいると、どんどん悪化していき、重症時には体が痛くて起きあがることもできない、でも痛いから寝ることもできないというようなほとんど寝たきりの状態が5年ほど前にはあった。設楽町地域おこし協力隊を今年3月まで3年間行い、その後4月から個人事業として山の搾油所という名前で事業をスタートした。協力隊活動、またそこから現在の事業に至るまでを報告したいと思う。「山の搾油所」では、みなさんが普通に飲まれるお茶の種子から搾った油をスキンケアオイルとして販売するというをしている。こういった事業を私の地域おこし協力隊であるとかそれ以前の職歴などを活かした形で実現させた。

山間地域での療養と体調の回復

治療法もないという中で、いわゆる空気のきれいなところへ移る、転地療養することで改善したという例があると聞いた。いままでの仕事や生活は全部一旦諦め、豊田市の山間部で療養することにした。

その山の中で1年半ほど、仕事もできず療養に集中していた。自然の中だったら段々動けるようになる、町に戻ることはできないけれども、空気のきれいなところだ

ったらまた社会復帰できるんじゃないかなと考えるようになった。そうしたところ、設楽町で自然や原生林の魅力を発信したり、それらを何か新しく活用ができないか考える、地域おこし協力隊の募集中であることを聞いた。そこで、社会復帰の第一歩くらいの思いで、協力隊になりたいと申請を出しまして採用されたというのが2015年の4月である。そこから地域おこし協力隊として3年間勤めた。そうしている間にどんどん体調がよくなっていった。これは町には戻らずに、そこでなんとか仕事を作り定住したいと任期中に考えるようになり、2018年4月から協力隊の時から住まわせてもらっている地区にそのまま定住して起業した。

地域おこし協力隊活動と事業化への模索

協力隊をやっていた時の活動内容は、観光振興とか教育に近いような活動なのかと思う。農業体験のようなことも企画していた。やりがいや意義はあるのですが、このままやり続けていても、収益を上げてその事業を継続するのは難しいと感じ、私自身が定住するための事業としてこれは無理ではないかと1年目から感じた。ただその意義はやはり大きなものなので、協力隊活動3年間を通じて続けていましたし、協力隊任期後の現在も出前事業、イベント企画補助、ツアーガイド、自然保護など、いろいろやらせてもらった。そういったことで1年目から、今の環境で自分の体調もよくなってきたので、なんとか住み続けたいけれど仕事になるものはないだろうかという目でみていたところ、衝撃的なものに出会った。

茶種子との出会い

お茶の花や実を、実は私自身協力隊になって1年目に初めて見た。植物を扱っていた身として恥ずかしいが、お茶はツバキ科の植物で、ツバキの花に似たお茶の花を見て、ツバキ油みたいなものがお茶からも採

れるんじゃないかなと漠然と思ったというのが一番最初のきっかけである。そんな思い付きからいろいろ調べ、これは事業にできるんじゃないかと思い、協力隊活動2年目から、それまでの活動と並行しながら事業化を検討し、起業の準備を始めていった。

私が住んでいた設楽町田峯は、無農薬でお茶栽培が行われているところであった。いろいろな理由から、お茶畑を続けていくのが難しく、放棄茶畑が増加している状況がみられた。お茶の種は誰も何も使っていない資源で、ただただ畑に落ちているものでした。これらの茶種子を使って田峯地区に搾油所を設け、地域おこし協力隊として事業を立ち上げることにした。

茶種子の分析と起業への準備

まずお茶油が本当にすばらしいものであるかを研究所や分析会社の協力で分析してもらった。その結果、お肌を調えるのにすごくいい油だということがわかった。

この事業を進めるには地域の方々の協力が不可欠で、偶然にもご近所さんが田峯のお茶組合の組合長で、事業の相談をしたところ、やってみろとすぐに言ってくれたし、地区の中に物置になっている建物があり、ここを油を搾る作業場として使わせてもらったりして、地域の応援がとても大きかった。

また、協力隊活動ということで、いろいろな専門家に会いに行き、事業計画を立てたり、詰めたりしていたし、私自身が科学系にいたということで化粧品の取り扱いの免許も取れた。この許可はとても難しく、個人ではなかなかできないことであったが、そういった強みも生かした。

資金面では、協力隊の活動費で専門家に相談できたし、協力隊が起業するという時に国の補助も受けられるし、設楽町で起業の補助金や貸付・給付金制度がいくつかあったので、そういったものも有効に活用さ

せてもらい、無理なく事業をスタートできた。

地域や関係各所とのつながり

協力隊だったことで、行政や信金、県など、いろいろなところとつながりができたり、それを活かしながらサポートを受けたり、コラボをさせてもらった。県の事業での起業支援などの事業に加わらせてもらったり、ツアーなども開催した。

また隣町の東栄町が naori という手づくりコスメの事業を行っている。原材料のコラボとか地元産のものを使いたいとお願いいただき、リップクリームやネイルオイルの原料に使われている。

自分が住んでいる設楽町田峯では伝統芸能が非常に盛んで、お盆には太鼓をたたいたり、住民が地歌舞伎を演じる地区である。こういったことに最初るときから混ぜていただいて地域で受け入れてもらっている。楽しめて、すごくいい経験をさせてもらっている。その恩返しが少しでもできたらなと思っている。

まとめ

いまはお茶の油だけの紹介であったが、ほかにもいろいろな植物の油があり、日本の山里でまだ活用されていない資源を商品化していく計画である。その油の材料をきちんと地域で集めてそれを買取するという形で、元々の畑の所有者の方や地域に経済還元し、お茶畑に手を入れることで獣害対策や里山の環境保全につながっていけるような事業にしていく。

■地域おこし協力隊としてのキャンプ場の立て直しと地元とのつながり

現浜松山里いきいき応援隊 川道光司 氏

はじめに

私は、出身は千葉県市原市で、前職は自然学校で環境教育や自然体験、アウトドアのガイドをやりながら富士宮市に住んでいた。自然学校に勤務している際に、ガイドや環境教育のほか、大工仕事や農業、狩猟もやり、そういう技術が自分に身についたことで、自分の暮らしを始めようと、浜松山里いきいき応援隊に採用され、2016年4月から浜松市天竜区龍山町に来た。まだ任期中で2019年3月まで残っている。



龍山について

龍山町は、町まで車で30分かかるところだが、天竜区でも比較的浜松の市街地まで近い位置である。人口は619人、平均年齢は67.7歳で、典型的な過疎地域である。平成17年まで龍山村で、静岡県で最後まで村を貫き通した地域である。天竜川が中央を流れていて急峻な斜面がそれを取り囲んでいる。斜面にへばりつくようにして人が住んでいる感じである。平らなところがないので、田園風景はもちろんない。学校も数年前にすべてなくなってしまった。ぱっとみて目立つような観光資源はない。だけど私自身は本当にそれがいいなあとここで住むことを決めた。どこにでもありそうな村だと私自身は思っている。

浜松山里いきいき応援隊の採用とキャンプ場の再開

実は、私は地域おこし協力隊になってキャンプ場を再生させるために龍山町にきたわけではない。純粹に自分でキャンプ場を運営することが夢であった。それがたまた

まキャンプ場が空いたということでやってきた。目的を持ってきたら、浜松版の地域おこし協力隊、浜松山里いきいき応援隊に採用されたというわけである。就任後すぐに龍山秘密村村長となり、キャンプ場を4月に開村することが決まって準備が忙しかった。

ここは以前、龍山青少年旅行村であった。40年前にできた野外教育施設で、林間学校やボーイスカウトを受け入れるキャンプ場であった。ずっと村の補助金で運営されていたが、平成17年に浜松市に合併されてからは補助金が減らされ、管理人が予算的に運営できないということで2014年いっぱい辞められて、閉村してしまった。私が2016年来ましたので約1年間休業中であった。

キャンプ場の運営と企画づくり

さきほどどこにでもありそうな村といったが、「どこにでもありそうな村のどこにでもありそうなキャンプ場」で、これがとても重要なところだと思っている。これといって特別なことをやっているわけではないが、まだ実質2年目で、グランドオープンしたのは2017年であるので、ようやく1年半終えたくらいである。

この施設は、自前でテントを張ったり、コテージに泊まるなど、最低限の荷物を持ってきてバーベキューし、泊まることのできる宿泊業務がある。カフェも用意し、もうひとりの女性スタッフが地元の食材を使ってサンドイッチを作ったりして販売している。キャンプ場では、夜はバーをやっていて、常連客の夫婦と会話をして楽しんでいる。

これ以外にイベントやプログラムを実施している。例えばアウトドア婚活、音楽系のイベント、50メートルの流しソーメン、結婚パーティーです。貸切では地元のおばちゃんたちに食材を提供してもらったり、

音楽好きの村外の夫婦を招いて、一日中演奏するなどのイベントをしている。

最初の3年とはとにかく親子をターゲットにし、有料プログラムで山の中で園児と自由に遊ぶだけの森のようちえんを開いてみると、親子がよく遊びに来た。ここに参加してくれた子どもが小学生になると、もっと長く滞在するために宿泊の申し込みで埋まるようになった。アウトドアとしては、マウンテンバイクや洞窟探検、山登りやクライミングなどのツアーをやった。すべてのイベントやプログラムには地域性をできるだけ盛り込むようにしているので、食、狩猟、木こりの文化、一緒にニワトリを屠畜し食べる体験を企画し、子どもや大人たちにもいい影響を与えられるような田舎ならではの環境教育や暮らしの講座を実施している。運営体制は、地元のNPO法人と龍山協働センターで、NPOの人たちがバックアップし、それを協働センターの職員がまとめて書類を作って、補助金を獲得してくるというような連携体制ができており、物事の進み方がとても早い。

私がこのキャンプ場を始めるにあたって、地域おこし協力隊になるつもりはなかったといったが、どうにかして食っていこうという覚悟でやって来た。3年もあればいいだろうと思い、おかげさまで地域おこし協力隊の報酬をいただいていることもあって、2年目にその目標が大幅に達成できた。いまは2人体制で、1年間フルで一定の給料を出しても余るくらいの収益を上げることができている。ここがすべてかなと思う。

成果と今後の課題

私の目標は3年目までに地元で根付くということであったので、それ以降はアウトドアを楽しむ大人の方や外国人の方も来ることを想定していたが、営業期間にたくさんの日帰り・宿泊客の方が来て、実施するプログラムが毎回満員になるほどとなった。

龍山町には若い人がほとんどいない。この地域を本当に助けるためには、人が根付いて、延いては定住者が増え、さらに賑わいを取り戻すことができれば地域の方たちは喜んでくれると思っている。収益性ばかりを求めてしまうと、地域性や社会性の意義が薄れてしまう。地域に還元しながら、小さい子どもたちに意義あることをしながら収益も確保して、そこで自立して生きていくことが大切だと思う。これからいろいろと事業を拡大していこうと思っているが、その時は当然人材が必要になってきているので、そこをどう確保するのが課題である。

まとめ—私の目標—

龍山秘密村という活動の拠点ができたので、今後は収益性と社会性のバランスを考えながら地域に還元できる私のやりたい事業を進めていこうと思っている。

私は地域に入るためにはそれなりの覚悟が必要だと思いつているし、それを地域の方にしっかりと示さないといけないと思っている。目標や目的などを打ち立ててしまおうとかなりリスクを負うことになるが、私の実体験では、そういったリスクに対して、地域や行政の方たちが支援をしてくださると思っていたので、私は目的を持って地域に入ってきた。地域に来て自分の目標が見つかったらしっかりと意思を示さなければそれなりの支援を受ける資格がないのではないかと思っている。それをしっかりと出して目標を示すことができれば地域にとっても大きな力になると思っている。

「どこにでもある村、どこにでもあるキャンプ場、どこにでもいるおじさん」ということで、これからも特別な場所になりたいと思っている。

■ 獣の有効活用したけもかわ project の 立ち上げと村づくりを目指して 元泰阜村地域おこし協力隊 井野春香 氏

はじめに

私は熊本県出身で、元々小さい頃から動物が好きで、農業高校の畜産科学科へ進んだ。たまたまこの高校には野生動物部門があって、そこでシカを育てたことがきっかけでシカが大好きになった。シカに興味を持ったことで、そこからシカに関わることをやろうと思い、森林を勉強することを考えた。そのときにたまたま島根大学のシカと森林に研究が最初に目にとまり、ここへ進学した。大学に入ってから出雲大社あたりのシカによる被害の研究を少しした。また有害駆除されたシカたちのサンプルを採取や解体などを経験したことで猟師に興味を持ち、いまにつながっている。



泰阜村へ

大学卒業して、泰阜村にある山村留学や自然体験を行う NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターに就職した。ここでは3年間勤めいろいろ経験を積んで退職した。退職後、シカに関わる活動をもっとしたいと思っていたときに、地域おこし協力隊の制度があることを教えてもらい、泰阜村地域おこし協力隊として活動することになった。私の場合は、村からはこういう任務をしてほしいという村の意向があったので、その合間の時間で、シカのことをやるということになった。

地域おこし協力隊の活動内容

泰阜村での協力隊の処遇は、雇用関係は嘱託職員で、役場で社会保険等の加入、嘱託職員であったので副業はできなかった。村からは最初は要望が1つ割り振られ、そ

の後の相談次第で私は変更ができた。基本的には村内全域で、同じ時期にいる協力隊が村内で偏らないように住居は分散された。住んでいる地区以外の地区でも祭りなどの行事には積極的に参加していた。

協力隊の活動内容は、「命題解決型」と「自己実現型」があり、これをやりたいと思い、協力隊になった。しかし村からの仕事もあった。両方備えつつ、ただシカのことはどうしてもやりたいと思っていたので、4月に着任してから部署の中で早々にプレゼンをし、けもかわ project をやりたいことを訴えた。こういうことをしていくうちに、仕事の内容の割合が最初は2~3割くらいだったけもかわプロジェクトが、1年後には8~9割になり、けもかわ project と体験事業を進めることができるようになった。

けもかわ project とは

「けもの（獣）の皮」と「けもの（獣）かわいい（可愛い）」と「けもの（獣）のかわ（皮）いい」の3つの意味をこめてつけた。このプロジェクトのミッションは、「頂く命をムダにしない」ということが一番で、なおかつ「捕獲される獣の有効活用を通じた村づくり・ヒトづくり」ができればいいなと思って立ち上げた。

この当時立ち上げようと思う以前、グリーンウッドに勤めていたころに、南信州地域でシカに関して何かやろうと思った。このときに最初に調べたのがシカの肉屋の数であった。思ったより数があって、競合を避けるためにやめた。そこで誰もやっていない皮を使ったものを考えた。当初やり始めたときは皮に関して知らないことだらけで、協力隊の活動はまずは皮づくりから始めた。その次に製品を試作しながら何ができるかなと模索を始めた。そういった皮を体験事業に落とし込んでいこうかと思い、狩猟体験やクラフト体験も始めることにした。

次に、けもかわ project の協力隊時代の目に見える成果は、3年間のうち、400枚を皮として利用することができた。長野県の「地域発 元気づくり支援金事業」など、補助金を活用した。お金をたくさん使ったと感じているが、そのおかげでけもかわ project を進めることができた。

独立後の事業化と取り組み

協力隊任期満了後は、それをそのまま引き継ぎ、個人事業主としてけもかわ project を立ち上げた。皮をつくって販売することと皮製品の販売、猟の体験などを中心に活動している。個人事業主としての1年目は、単体で個人事業をやるのは難しく、先輩協力隊 OB の手伝いやジビエを扱うお店でアルバイトをしながら活動をしていた。こうしたなかで、皮に関わっていくと、ジビエに関してもいろいろとわかってきて、解体・加工施設が必要だと感じてきた。この当時まだ泰阜村にジビエの加工施設はなかったので、猟友会の方たちに協力してもらって、村に相談した。そして国と県、村の補助を受けて、2017年によく泰阜村ジビエ加工組合「もみじや」ができた。

村から管理委託を受けて、猟友会の中で私が担当者として施設の管理運営を任された。現在、「もみじや」の管理委託の委託料がメインの収入で、けもかわ project をやっている。

施設の管理運営のほか、狩猟などの体験事業を行っており、主に有害鳥獣の駆除期間に実施している。それに付随してクラフト体験で角の加工や地元の小学校での講座、夏の親子レクリエーションなどをやっている。また、地元の高校の美術の授業で、角のクラフト体験や皮づくり体験なども依頼があった。

やはりなかなか収支につなげることが難しく、個人事業の範囲内では、あまりたくさんの皮を活用できないので、クラウドフ

ワンディングを活用した。みなさんに応援していただけて無事に事業ができた。

今後の課題

今の課題は作業する人手が足りないことである。来年度からはやはり、その課題を何とかしないといけないと思ってやっている。一人で回していくのが厳しい状況であったので、昨年度の実績が200頭前後の目標が150頭前後にしかならなかった。今年も厳しい状況で、100頭前後にしかなくてない。こういったところを改善しないと、地域の中で継続的にやっていくのは厳しい状況だと思っている。また、それらを活用した料理は、泰阜村の場合は、鹿肉の人氣が少なく、猪肉のほうが人氣がある。先日、長野県知事が来られたときに鹿肉をぜひ食べるようにと言っていたが、泰阜村では消費量が少なく、現在は東京などの飲食店に卸しているのがメインとなっている。

泰阜村で暮らすことは、今のところ目標として掲げているので、ここでもかわ project を通して皮の活用がずっと継続的にやっていけること、そしてジビエ肉の加工などが継続的にやっていけるよう仕組みづくりを考えている。

■コメント

NPO 法人地域づくりサポートネット 代表理事 山内秀彦 氏

お三方のお話を聞きながら、非常に頑張っておられるなあと感じた。基本的に自分の専門的なスキルを持っていたことがこの場で



発表された方であった。そして地域おこし協力隊が地域と関わりやつながりを持ちながら地域に支援や応援を受けて活動期間内でうまくやっていたということが印象的であった。生業やビジネス、くらしとしてやっていくため、1つの事業だけでなく、いくつか事業がある、そのなかで柱となる事

業とそれに関連する事業もあることは非常に素晴らしいと感じた。順調になればなるほど、こういう地域ですから人材の確保が最大課題になるのではないかと思った。

■NPO 法人てほへ副理事長 大脇 聡 氏

3名の方は、現時点で成功に向けた道を進んでいると思う。私はIターン者だが、地元民として思うことは、人口が減ったり、少子化や高齢化が進んで、祭りや地域の必要な連携が維持できないことが現状である。三遠南信地域の中山間地域でも同じ課題となっており、そういうところにみなさんは自分の仕事として事業をやっていると思われるが、それと地域の暮らしが両立していないとかなかなか事業は進められないと思った。



■大原屋コミュニケーションズ 代表 尾澤 章 氏

みなさん、目的があって現実的で立ち向かってきたんだということが伝わってきた。現在、事業化が進んでいると思うが、個人化してしまっているというか、お三方でなければならぬ仕事が増えていってしまったときに、きっと時間の無さにぶつかってくるのでは思う。さきほどの話にあった会合やミーティング、行事に呼ばれる機会が増えることによって育ててきた事業が鈍化してしまうことが悩みになってくるのではないかと思った。



■質疑応答

●現在の収支と将来どれくらいしたら生活できるのか見通しはどうか。

杉浦：今年度の売上としては協力隊の時の給料よりも多くなっている。

川道：今は副業が本業になった。キャンプ場の土地が浜松市の持ち物でそれを借りる上で、NPO 法人の名前が必要でそこに所属しており、管理運営組合で収益事業を賄っている。

井野：基本的にジビエ加工施設の管理委託料が今の最低限の利益で、それに加えてけもかわ project の売上がある。

●協力隊費で購入した物は、退任後どうしているのか。

杉浦：固定費として費用がかかる搾油機などは協力隊費では買わなかった。

川道：協力隊費という概念は全くなく、1円も使っていない。

井野：売上は村の会計に入れ、備品等は引き継ぐ者がいなかったため話し合いでそのまま使うことになった。

■閉会あいさつ

NPO 法人地域づくりサポートネット

代表理事 山内秀彦氏

三遠南信住民ネットワーク協議会は、行政や経済界にも私たちの活動に協力を得られるようにアピールをしている。地域おこし協力隊のOB、OG、現役隊員のみなさんとうまくつながりを持てればと思っている。本日はどうもありがとうございました。